

斎藤一郎著『ゴンクール兄弟とその時代』

(水声社、2021年)

坂 卷 康 司*

フランス最大の文学賞「ゴンクール賞」にその名を残す、19世紀の小説家ゴンクール兄弟 (Edmond de Goncourt, 1822-1896, Jules de Goncourt, 1830-1870)。自然主義文学の代表的な小説家として知られるこの兄弟は、ジャポニズムが隆盛を極めていた当時のフランス美術界で数多くの批評を執筆し、当代随一の美術コレクターとしても名を馳せていた。彼らが書いた長大な『日記』*Journal*はこの時代人間模様を知る貴重な資料として今でも参照されるなど、フランス本国では文学史上においても美術史上においてもこの兄弟は重要な存在と見なされている。だが、彼らに関する研究書は不思議なことにフランスでもさほど多くはなかった。日本では、戦前から戦中にかけて永井荷風や後藤末雄が著作の中でその名に触れたことで、彼らの業績は一定の評価を得てはいたが、小説の翻訳に関しては1950年代に『ジェルミニエ・ラセルトゥー』*Germinie Lacerteux* (1865)などが刊行されたのみである。同じく1950年代から60年代に刊行された『日記』の翻訳は、元々戦後すぐに出されたものの再版だが、これも現在ではなかなか入手できるものではない。そのような状況が長く続いたため、20世紀の後半、ゴンクール兄弟はフランス文学の業界においてもなかなか忘れられた存在であった。

この状況に風穴を開けたのが、1990年代中盤以降の斎藤一郎氏らによる活躍である。東京藝術大学教授であった斎藤氏が1995年に岩波書店から刊行した『ゴンクールの日記』は抄訳ながら充実した内容を誇り、2010年に岩波文庫に上下巻で収まった。増補された文庫版は上下で1100頁を超える浩瀚な書物となり、非常に読み応えがある。さらに2000年代以降になると、美術商、林忠正 (1853-1906) との関係から再び注目が集まり、武蔵大学で教鞭をとる小山ブリジッド氏による評伝『夢見た日本——エドモン・ド・ゴンクールと林忠正』(平凡社、2006年)などの関連書が続々と刊行される。その一方、19世紀美術の専門家である隠岐由紀子氏による翻訳書が相次い

* 東北大学大学院国際文化研究科・多文化共生論講座教授

で平凡社東洋文庫から刊行されるばかりか（『歌麿』、2005年、『北斎——18世紀の日本美術』、2019年）、近年はフランスにおいても2種類の伝記が相次いで刊行されるというような事態が到来している（Pierre Ménard, *Les Infréquentables Frères Goncourt*, Tallandier, 2020 ; Jean-Louis Cabanès, Pierre Dufief, *Les Frères Goncourt*, Fayard, 2020）。こうして見ると、日仏両国において、ゴンクール兄弟への関心は今が一番高まっている時期なのかもしれない。そのような状況下、満を持して刊行されたのが、『日記』の訳者、斎藤一郎氏による評伝『ゴンクール兄弟とその時代』（水声社、2021年）である。

本文のみで540頁近くもあるこの大部の評伝は、1991年から2000年にかけて、『東京藝術大学音楽学部紀要』第17号から26号に9回にわたって斎藤氏が発表した論考が元になっている。そのタイトル通り、本書は、19世紀後半のフランスという激動の時代において、その時代を生きた著名な人物たちとゴンクール兄弟がいかに対峙して行ったのか、という点に照準を絞っている。この時代のフランスは、第二帝政、普仏戦争、パリ・コミュン、第三共和政と目まぐるしいほど政治状況が変化するが、それに応じて主流となる芸術思潮もロマン主義から写実主義、そして、象徴主義、自然主義と次々に変貌を遂げて行き、思想的な部分でも地殻変動とも言うべき事態に陥っていた。その一方、首都パリではオスマンによる都市改造が進み、それを土台に数度にわたって万国博覧会が開催されるなど、市民社会は隔々にいたるまで慌ただしい様相を呈していた。このような激動するフランス社会を舞台とする本書は、その最初の三分の一ほどが1870年までの兄弟の歩み——弟のジュールが亡くなり、普仏戦争が始まるまでの時代——に頁が割かれている。ここでは、著者は軽やかな筆致によって様々な逸話に触れながら、兄弟が生きた当時のフランス社会の姿を活写して行く。中盤から後半部分になると、オッフェンバック作曲の数々のオペレッタが社会にもたらした狂騒の他、小説家ユゴー、フロベール、ゾラ、アルフォンス・ドーデ、女優サラ・ベルナール、写真家ナダール、作曲家グノーなど、この時代を代表する重要人物たちと主に兄エドモンとの関係性が中心になる。華やかで多彩な登場人物たちが次々に現れるため、しばしば眩暈のような感覚に襲われるが、こうした箇所ではそうした人物たちと渡り合うエドモンという作家の実に人間味のある性格を読者は感じ取ることになるだろう。中でも、互いにその才能を認め合ったフロベールとの関係性を語る28章は、本書の中でも非常に味わい深い箇所となっている。

また、そのような一癖も二癖もある人物たちとの出会いの物語が続く中、ジャポニスムを扱う22章は『日記』の訳者ならではのものと言える。エドモンが執筆した『歌麿』と『北斎』という二冊の本は、この日本を代表する浮世絵画家についての最

初期のモノグラフィーとも言うべきものだが、これらが一体いかなる状況下で書かれたのか。そして、ジャポニスムの仕掛け人とも言うべき美術商、サミュエル（ジークフリート）・ピングとのあいだでいかなる駆け引きが行われたのか、といった事柄についても語られる。世界を巻き込むことになるジャポニスムという一大芸術運動の裏側で、どういうことが起こり、どういう人物たちが蠢いていたのかが明かされる部分は、19世紀フランスの文化史に関心がある者には実に興味深い内容と言える。

著者の齋藤一郎氏は1933年生まれ。1960年代後半、花輪莞爾、中山真彦、宮原信、朝比奈諒という後の時代を代表する気鋭のフランス文学者たちと共に「マルメ「イジチュール」について」という共同研究班を組織し、この難解な散文詩の読解に果敢に挑むという形で仏文学の世界に颯爽と登場された。シャンフルーリ、ボードレールを論じられたこともあるが、それ以外は一貫してゴンクール兄弟の研究に情熱を注がれ、論考と翻訳を發表されて来たという点で、齋藤氏はまさに日本における唯一人のゴンクール兄弟の専門家と呼んでも大袈裟ではないだろう。その齋藤氏の手によって、ゴンクール兄弟に関する大部の評伝が刊行されたことは、フランス文学・美術研究者のみならず、一般読者にとっても資する部分が多いと考えて良いのではないのか。

近年、近現代の歴史を壮大な射程から見直し、これまで以上に稠密な資料を紐解きつつ、丹念に分析しようとする書籍がフランスにおいては相次いで刊行されている。残念ながら、日本ではヨーロッパ社会への関心がかつてほどは高くないということもあり、19世紀フランスを主題とする書籍が刊行される割合は必ずしも高いとは言えない。しかしその一方、ジャポニスム関連では、今井祐子氏による『陶芸のジャポニスム』（名古屋大学出版会、2016年）、寺本敬子氏による『パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生』（思文閣出版、2017年）、三浦篤氏による『移り棲む美術——ジャポニスム、コラン、日本近代洋画』（名古屋大学出版会、2021年）など、歴史学や美術史の分野において優れた研究書が次々に登場して来ている。こうした重厚な学術書と比べれば、本書は遥かに気軽に手に取れる読み物だ。謹厳実直な研究者が扱わないような話題が本書には満載だが、このように具体的で生々しい出来事の報告——事の真偽は定かではないが——を数多く含んでいるという点で、先に挙げた研究書を補う役割を果たすのではないだろうか。

そうした点からすれば、本書の出版はまさに時宜に適ったものだったと言える。本書の冒頭で齋藤氏自身が書かれていたように、この『ゴンクール兄弟とその時代』の刊行がゴンクール兄弟への関心を若い読者に促し、近い将来、彼ら彼女らがフランス文化史や社会史、あるいはジャポニスム研究の分野を牽引するようになること

が待ち望まれる。

(水声社 2021年9月刊 A5版 584頁 8000円+税)